

ガザ大虐殺は、入植者植民地主義の最終段階である

2026 年 2 月 11 日
早尾貴紀（東京経済大学）

1、10.7 ガザ蜂起、2年4ヶ月の虐殺、そしてトランプ和平案の欺瞞

- ◆ 2023 年 10 月 7 日、「テロ」か「抵抗」か
難民収容所→強制労働収容所→絶滅収容所、としてのガザ地区
- ◆ 10 月トランプ和平案から、11 月国連安保理決議を経て、1 月「平和評議会」発足
トランプ提案=「第二バルフォア宣言」、安保理決議=「米国委任統治」？
- ◆ ガザ地区の現状とイスラエルの狙い
ガザ地区の 2 分割・縮小と、封鎖による荒廃・非人間化

2、グレートゲーム史観と植民地主義

- ◆ イギリスとロシアと日本によるユーラシア大陸という盤上の「グレートゲーム」
1830 年代オスマン帝国領シリアをめぐり英仏露が介入、英國パレスチナ保護領化を主張
- ◆ ロシアを共通の「敵」としたイギリスと日本の帝国主義同盟
クリミア戦争、日清・日露戦争、第一次世界大戦… 日本の東アジア植民地権益の確立
- ◆ 1882 年頃からポグロムで東欧・ロシアのユダヤ人が、アメリカやパレスチナへ集団移民
ヘルツルが 1896 年『ユダヤ人国家』刊行、97 年「世界シオニスト会議」

3、転換点としてのバルフォア宣言・英国パレスチナ委任統治

- ◆ 第一次世界大戦によるオスマン帝国の分割、アラブ諸国家体制
例外としてのパレスチナ：バルフォア宣言から英國委任統治へ
- ◆ 英國委任統治下「民族自決」をめぐるダブルスタンダード
ユダヤ人入植者に推奨された自決・組織化と先住パレスチナ人に否定された自決権
- ◆ 周到に準備されたシオニストによるパレスチナ「民族浄化」計画
国連分割決議を経て 1948 年イスラエル建国、パレスチナ人追放・難民化、ガザ地区形成

4、「現在進行形のナクバ」（アン=ナクバ・アル=ムスタミッラ）

- ◆ 残された「2割」の土地=ヨルダン川西岸地区とガザ地区に対する執着
1967 年に西岸・ガザを軍事占領するとパレスチナ人の追放とユダヤ人入植を開始
- ◆ グローバルな新植民地主義としてのオスロ体制（1993 年）と日本の加担
占領・政治問題を隠蔽し「人道支援」「経済」の問題にすり替え
- ◆ 「自治政府」「自治区」とは何か？
オスロ合意で失われた入植地返還・自衛権・難民帰還権、拡大自治協定による細分化

5、〈10.7〉蜂起へ至る 2000 年代「一方的政策」を振り返る

- ◆ 2000 年キャンプ・デーヴィッド会談決裂
何が提案されたのか？ 決裂の責任は誰にあるのか？ 第二次インティファーダへ
- ◆ 2002 年、西岸地区「隔離壁」建設開始、2005 年、「ガザ一方的撤退」
イスラエルによる土地の一方的な併合と封鎖の始まり、パレスチナ自治政府の終わり
- ◆ 2006 年パレスチナ議会選挙で「反オスロ」ハマース勝利とパレスチナ分断
イスラエル・米国の介入、傀儡ファタハが西岸制圧、ハマースをガザへ追放、ガザ攻撃

6、私たちは何をすべきか：アルバネーゼ報告を読む

- ◆ 2025 年 6 月報告「占領経済からジェノサイド経済へ」
占領からジェノサイドまで、イスラエル内外の民間企業の関与
- ◆ 2025 年 10 月報告「ガザにおけるジェノサイド——集団犯罪」
欧米諸国、アラブ諸国、その他の国々によるジェノサイド帮助
- ◆ 新植民地主義としての米国＝イスラエルの「新中東構想」と世界の加担
パレスチナの民族浄化＝入植植民地主義を止める、国連と世界各国、市民の責務は？

【講師プロフィール】

早尾 貴紀（はやお たかのり）

1973年生まれ、東京経済大学教員、パレスチナ／イスラエル研究、社会思想史

1990年代の「オスロ和平」期にパレスチナ／イスラエルを訪問、ガザ地区にも入った

2002-04年（第二次インティファーダ期）にヘブライ大学客員研究員として東エルサレム在住、パレスチナ人学生らとシェアハウスで暮らす。西岸地区、ガザ地区、イスラエル国内でフィールドワーク

2011年より東京経済大学教員。海外研修プログラムで学生らをパレスチナ／イスラエルのスタディ・ツアーに引率

【著書】：

*『いつの日かガザが私たちを打ち負かすだろう——早尾貴紀対談集』（青土社、2025年）

*『イスラエルについて知っておきたい30のこと』（平凡社、2025年）

*『パレスチナ、イスラエル、そして日本のわたしたち』（皓星社、2025年）

『パレスチナ／イスラエル論』（有志舎、2020年）

『希望のディアスポラ——移民・難民をめぐる政治史』（春秋社、2020年）

『国ってなんだろう？』（平凡社、2016年）

『ユダヤとイスラエルのあいだ——民族／国民のアポリア』（青土社、2009年、新装版2023年）

【共著・共編著】：

『交差するパレスチナ——新たな連帯のために』（在日本韓国 YMCA 編、新教出版社、2023年）

『残余の声を聴く——沖縄・韓国・パレスチナ』（吳世宗、趙慶喜との共著、明石書店、2021年）

『シオニズムの解剖』（赤尾光春との共編、人文書院、2011年）

『ディアスポラから世界を読む』（赤尾光春との共編、明石書店、2009年）

『徐京植 回想と対話』（李杏理、戸邊秀明との共編、高文研、2022年）

【翻訳書】：

*ハミッド・ダバシ『イスラエル＝アメリカの新植民地主義』（早尾貴紀訳、地平社、2025年）

ハミッド・ダバシ『ポスト・オリエンタリズム』（洪貴義、本橋哲也他との共訳、作品社、2018年）

*ジョー・サッコ『ガザ 欄外の声を求めて Footnotes in Gaza』（早尾貴紀訳、Type Slowly、2024年）

イラン・パパ『パレスチナの民族浄化』（田浪亜央江との共訳、法政大学出版局、2017年）

サラ・ロイ『ホロコーストからガザへ』（岡真理、小田切拓との共訳、青土社、2009年、新装版2024年）

*サラ・ロイ『なぜガザなのか——パレスチナの分断、孤立化、反開発』（岡、小田切との共訳、青土社、2024年）

ジョナサン・ボヤーリン、ダニエル・ボヤーリン『ディアスポラの力』（赤尾光春との共訳、平凡社、2008年）

【監訳・解説】：

*フランチェスカ・アルバネーゼ『ガザへの集団犯罪』（早尾貴紀ほか監修・解説、地平社、2026年）

*イラン・パパ『イスラエル・パレスチナ紛争をゼロから理解する』（早尾貴紀監修、河出書房新社、2025年）

*リファト・アルアライールほか『ガザの光——炎の中から届く声』（斎藤ラミスまや訳、明石書店、2024年）

エラ・ショハット／ロバート・スタム『支配と抵抗の映像文化』（法政大学出版局、2019年）